

青い顔かけの勇士

鈴木三重吉

青空文庫

トウロツトのお家^{うち}は貴族で、お父さまは海軍の士官ですが、今は遠方へ航海中で、トウロツトはお母ちやまや女中のジャンヌたちと一しよに、海岸の別荘でくらしてゐます。トウロツトにはイギリス人の或^{ある}ミスが、まいにち家庭教師にかよつて来て、町中や浜べへつれて出たりして、いろ／＼のことををしへてゐます。

「おぼつちやま、ミスがいらしつて、おまちになつていらつしやいますよ。」と、けさもジャンヌがよびに来ました。トウロツトは、つんぼのやうなふりをして、ぽかんと窓の外を見てゐました。

「これ、坊や。ジャンヌがよんでるのが聞えないの。」とお母ちやまがおつしやいました。

「聞いたの。」と、トウロツトは、むじやきな目を上げてこたへました。

「だつてお母ちやま、わかつてるでせう？ ほら。ぼく、ミスと一しよに出かけるとあきくしてしまふの。」

すると、お母ちやまは、すこしけはしくまみげをしかめて、

「さあ、早くいつてらつしやい。おとなですね。ミスのお話をよくおぼえて来て、お午のひるときにお母ちやまに話してちようだいね。」

トウロツトは、いやくこつちへ来て、なさけなささうにジャ

ンヌにもたれかゝりながら、小さな青服をきせてもらひました。それから頭をつき出して、リボンのついた帽子をかぶらせてもらひました。

「あゝあ、またミスのお話を聞かなげやならないのか。」とトウロツトはおもひました。お母ちやまはお話をすっかりおぼえて来るのだなんておどかしになりました。でも、それは、けつきよく、たゞおつしやるばかりだからだじようぶです。これまでだつて、お午のお食事ひるのときには、お母ちやまは、いろんなほかのことを考へていらしつて、朝おつしやつたことはわすれていらつしやるのがおきまりです。

ミスは、すっかり身がためをしてゐます。がんこな顔色を、み

どりいろの顔かけで、やはらげ、とてもおほきな両うでのとつきに、スコットランド出来の日がさと、だいくいろいろの、かりとちのご本をつかんでゐます。ふしくれだつたそのからだは、ちようど、うすつぺらな石炭袋へ石炭をぎゆうくつめこんだやうなかつこうです。茶のサージ服の下には、ごつくした骨ぐみが見えてゐます。たゞ服のまへの方だけが、くびのところから足のあたりまで、すべつくく、まつすぐに見え、まつ平たひらになつてゐます。ミスは、やせた手をつき出しました。トウロツトは、うでをのばしてその手につかまりました。ミスはトウロツトの手の平をぎゆうとにぎつて、づしんくと足をふみながら、さきに立つて歩き出しました。トウロツトは、せい一ぱいに大またをひらいてつ

いていきます。それは、まるで足長蜘蛛あしながぐもが小さなワラジ虫をおともにつれて出かけるやうなかたちでした。

ミスは、れいのやうに、せんさくをはじめました。

「トウロツトさん。きのふはどんなわるいことをしました？　一とうわるかつたとおもふことを言つてごらんさい。」

トウロツトにはお話がこんなふうにはじまるのは、かなひませんでした。かういはれると、うるさい、いやアなことをすつかりおもひ出さなければなりません。しかし、いやでもおもひ出さなくてはずまされません。トウロツトはきのふは、いろ／＼わるいことをしました。

さあ、一とうわるかつたのは何でしたらう。お午ひるごはんのとき

にお皿さらをひつくりかへしました。それから野菜をこぼしました。クリームを三どもおかはりをしました。それから、ばあやが、どんな顔をして飲むかとおもつて、コーヒーの中へインキをちよつぱりおとしておきました。それからうつかり、小猫こねこのプスをお客間へしめこんでしまひました。

ばあやがどんなお顔をし、プスがどんなにこまつたかは、トウロツトはお母ちやまには話しませんでした。しかしお母ちやまは、みんな、ちやんとかんづいていらつしやいました。プスをしめこんだのは、むろんプスのしくじりからも来てゐますが、トウロツトにも多少罪がないとは言へません。

これなぞは、みんな、しかられてもいゝことです。だけど、ト

ウロツトはまだもつとわるいことをしてゐます。さうく、あれが一とういけないことでした。きのふ、お母ちやまは、トウロツトの虫歯をうめに、齒のお医者のところへおつれになりました。

ところが、トウロツトはごうもん部屋のやうな、こはい手術室から、いやなにほひがぶんと鼻に來ると、そして、お医者さんや、おほきなひぢかけいすや、はがねの道具や、車、ピンセット、やすりなぞ、さういふいろんなものを見ると、死にもものぐるひで、こゞまりちゞみ、小さな口バのやうに、メーくなきはじめました。

お母ちやまは、ひどくこまつておしまひになり、ハンケチを出して、いすによりかゝつてお泣き出しになりました。それを見る

とトウロツトは、すなほに手術いすに上りました。でも、けつきよくはおなじことで、とてもこはくて、いやでたまらなくて、また泣き出しました。お母ちやまはどうくしかたなしに、お菓子屋へつれていつて、あまい、のみものを二はいと、お菓子を三つ、飲ませたり、食べさせたりして、やつとまたつれていらつしやいました。

トウロツトは、それだけをのこらずミスにお話しして、ぼくがわるかつたと言ひました。

「あなたのきのふの罪は、すべてあなたの勇気がたりないからです。けふは、古代や近代の民族、とくにイギリス国民の歴史から例を引いて、勇気のお話をしませう。イギリス人はこの徳性をり

つぱにそなへてゐます。その点では、いかなる国民も、イギリス人の足もとにもよりつけません。」

二

さあ、そろそろむつかしくなりました。トウロツトは、きつと、こんなことになるだらうとはおもつてゐましたが、いよよくとなると、うんざりしてためいきをつきました。まいあき、ミスに、前の日にしたわるいことを話すと、ミスはきつとすぐに、あなたにはこれくの徳性がたりないと言つてくどく話し出すのがお

きまりです。中でもイギリスの歴史から一とう多く例をひいて来ます。イギリスには、いろんな徳性が、どつさり、あふれてゐるものと見えます。ですから、トウロツトの頭の中にある英雄は、みんな、イギリスの兵たいのなりをしてゐます。

このまへトウロツトが、人の髪の毛を引つぱつたことをうちあけますと、ミスは友人といふもののうつくしさををしへると言つて、アシールとパトロークルのお話をしました。

トウロツトには、どういふわけか、そのアシールとパトロークルのことをおもふと、いつでもイギリス人の曲馬団で、うたつたりをどつたりしてゐた黒ん坊の顔が目にかかびました。ソクラテスだつて、トウロツトには、金ぶちの目がねをかけた、バラ色の

顔をしたイギリスふうの老紳士のやうにしかおもはれず、聖ルイさへも、牧師のウエブスターさんのすがたをしてあらはれて来るのです。

しかし、一とう多くいろく々な役になつて出て来るのは、いつも或ある小さなお嬢ちゃんと老夫人の乗つてゐる、二頭だての馬車の御者台の上にある、あのイギリス人です。ふとつた、あぶらぎつた赤ら顔の男ですが、これはミスのお話でできた、フランソワ一世になつたり、アジャクスにもなりジュリアス・シーザーにもクロムウエルにもなるのですからききたいです。

「トウロツトさん、聞いてゐますか？」

今、ミスはかう言ひながら、目を光らせてレオニダスが祖国を

まもるために、三百人のスパルタ人と一しよに戦死したお話をつづけます。と、おもふと、こんどはホラチユース・コクレスのお話です。これは、目つかちの勇士で、たつた一人で敵の全軍をひきうけて、一つの橋を防ぎまもつたのですから、レオニダスよりもすばらしいわけです。ミスはその話でもつてすつかり逆せ上つて、トウロツトの手をぐんぐんひつぱつて歩きます。

と、そのうちにミスはふと立ちどまりました。ムシユウス・スケボラは、ぼうぎやくな王を殺さなかつたのを悔いて、じぶんに刑罰を加へるために、手を火の中につつこんで焼きました。ミスはその話をしながら、片手をにゆつとまへにつき出しました。トウロツトはそのいきほひのすごいを見て、これは、ミスもスケ

ボラのやうに、じぶんで手をやいたことがあるのぢやないかとおもひました。しかし、ざんねんなことには、ミスの手には手袋がはまつてゐるので、手の先がやけおちてゐるかどうか、それが見えません。

あゝア、やつとイギリスの歴史になつて来ました。

聖地パレスティーンで、サラセン人をほろぼしつくしたのはリシャールです。ミスの日がさはサラセン人をきりたふし、よろひへうちこみ、または、そのときのリシャールの王家の旗じるしのやうに空中にゆらめきました。

トウロツトはミスがよろひを着て、騎士のやうに馬にまたがつて、やばん人にせめかゝる、いさましいすがたをかながへました。

ミスには、たぶん、よろひなぞはいらないでせう。あんなに、からだがかたいのですもの。この人にあたれば、どんな矢だつてみんなをれてしまふでせう。これではサラセン人も気のどくです。

ミスは一しようけんめいに話しつゞけます。

「近代では、かういふ崇高な功績といふものはきはめて少なくなりました。つまり、イギリス人の英雄的な行為を必要とする出来ごとが、永年来、なくてすんで来たからです。近いれいとしてはネルソンを上げませう。ネルソンはトラファルガーの海戦には、片手をもぎとられても、なほ艦隊運動の命令を下しつゞけ、命をなげ出して指揮をしました。それから、つぎにお話ししなければならぬのは……」

ちようどそのとき、小間物屋のまへに来ました。ミスは買ひものがありませんでした。トウロツトは、ぢきそばの散歩道のところまで歩いていきました。そのところでまつてゐようと思つたからです。ミスは店の中へはいりました。トウロツトは、こちらへはなれてしまひました。

トウロツトは、けふはいろんな英雄のお話を聞きすぎました。レオニダス、ネルソン、スケボラ、コクレス、リシヤール、これだけの人が頭の中でをどりまはります。トウロツトは、両うでをふり歯をむき出して、散歩道をいつたり来たりしてゐました。しかしトウロツトのうちでは、ミスのうちのやうに大きくもなく、黄色くもないのでいせいがありません。

ミスといふ人は、あんなにありつただけの徳性の話をしつてるのですから、じぶんでも、よほど徳性をどつさりもつてゐるにそうゐりません。トウロツトはミスがあまりすきではありませんが、でも、えらい人だとは十分おもつてゐます。

トウロツトは、とても三百人の人を……三百人を殺すのだつたかしら……三百人はとても一人では殺せさうもありません。じぶんでじぶんの手をランプで焼くつてことも出来ません。一ど、ろうそくでやけどをして泣いたくらゐですもの。ミスは、さつき、スケボラのやうに……何とかスケボラだつたつけ……あゝ、ムシユウス・スケボラだ。そのスケボラのやうにうでをつき出しました。でも、あひにくそばにランプがありません。もしランプがあ

つたら、ミスは手をやいたにちがひありません。あんなかさく
の手だから、をしげもなく焼いたにきまつてゐます。

ミスがネルソンになつたら、どんなにすばらしい、はたらきを
したでせう。トウロツトはミスが襟えりのたかい海軍服を着て、ばか
に長い片うでをぶら下げて、キイ／＼声で号令をかけるすがたを
おもひうかべて見ました。

ミスは、そのつぎには、レオニダス、コクレス、スケボラ、そ
れからもう一ぺんネルソンのすがたになつてあらはれました。そ
のほかの人たちは、みんなで一つのすがたになつて浮びました。
そのすがたといふのは……

おや、どうしたんでせう。ミスは？ あら、何をふざけるので

せう。ほう、とんだり、はねたりきちがひむすめ狂人娘のやうに、くるくまはりをしたりしてゐます。ミスがあんなことをするのは、はじめてです。

おゝ、ちらりとうしろへ目を向けました。おや、くるりと向きかはつて日がさをふりまはし、をかしな声でさげびながら、あとしざりをしはじめました。

どうしたんでせう。トウロツトは、しんぱいでたまらなくなりました。

あゝ、やつとわかつた。パン屋のちんはいやな犬です。あいつは、だれにでも、ウゝくゝうなつてとびかゝります。どうしたわけか、イギリス人の女をひどくきらふやうです。

そのちんが、今、うなりたけつて、ミスにとびかゝつてゐるのでした。うしろへひきさがつたかとおもふと、なほひどくうなつてとびつき、あと足で立ち上り、つぎには地びたへうづくまつて、きみわるく歯をむき出しました。はゝあ、あの犬をぢやらしたのは、きつと、ミスのふくらはぎです。ミスの靴下です。をかした犬もゐたものだ。あの犬が、骨をしゃぶつてゐるのを、よく見かけました。

ほう、だんくにはげしくつつかゝつて来ます。イギリスの女を食べてしまはうと、腹をきめたのでせう。ミスほほの頬はまつ青さをになりました。たゞ鼻だけが、危険におちいつた船の信号燈のやうに赤くもえたつてゐます。ちんはぐんぐそばへ来て、狂つたやうに、ミスほほのぐるりをかけまはります。それこそ、日がさでおどかしても、やさしい言葉をかけても、きゝはしません。だいたんにも鼻先で、ミスほほのスカートをひつかきます。

がつしりしたちんの齒は、ミスほほのすねの骨ぐみへ、くひつきかけました。ミスほほはふだんから、わけもなく犬がこはくてたまらない人です。ミスほほは、今はもう、こめかみをかくくさせ、全身につめたいふるへを走らせました。冷汗ひやあせがかさくの背中へじつ

とりとたまりました。もう、泣かんばかりの顔をして、たすけをさげぼうとしてゐます。でもたつた一つ、ミスがイギリス人であるといふ誇りから、なきごゑを出すわけにもいきません。

戸口に立つて、うす笑ひをかくしてゐたパン屋の店のものは、どつとふき出しました。

攻撃は、いよくもうれつになりました。ちんのいときり齒は、ミスのふくらはぎとおもふあたりへ、がくりとかみつきました。ミスは自尊心を失つて、ひどくあわてさわぎました。スカートをまくし上げて、ラクダのかけ足のやうに、くびのところまですねをはね上げました。もちろんは、もつとすばしつこくミスのイギリス製の、じょうぶなスカートをくはへました。ですからミスは

とび上ることが出来ません。おやといふやうにふりむいたなり、ちようど、かつゑた野獣のきばの下でふうく息をしてゐる羊のやうに、にらまれながら立ちすくみました。パン屋の人たちは店の入口で腹をかゝへて笑ひました。

と、犬は、きふに足の間にしつぽをはさみ、耳をたれて、一本の足を空へはね上げてキヤン／＼なきながらにげ出しました。トウロツトが、ふざけがあんまり永すぎるとおもつて、もつてゐたおもちやのシャベルで、犬の背中を力一ぱい、ごつんとくらはせたからでした。

敵のかげは見えなくなりました。ミスはイギリス人らしい威厳と冷やかさをとりもどして、トウロツトの手をとりました。ミ

スの血が静脈の中でめぐりはじめました。トウロツトは言ひました。

「ミスはずるぶん勇敢ね。ねえ、ミス。」

ミスは、さう言はれて、トウロツトの顔を、けはしい目をしてねめつけました。わたしのことをばかにしていふのだらうか。いや、さうではないらしい。トウロツトの、きよらかに、すんだ、二つの目には、皮肉なぞはちつともうかんではゐません。ミスは、おもはずからだをこぐめて、トウロツトに頬ずりをしました。

トウロツトは、ほかのことをかんがへてゐたので、ミスが、なぜだしぬけに、頬ずりなんかしたのかといふことを、あまり気にもとめませんでした。

食事のときにお母ちやまがおきゝになりました。

「けさはおもしろかつたの？ トウロツト。」

トウロツトはいさみ立つてこたへました。

「ね、お母ちやま、ミスはとても勇敢よ。お母ちやまに見せたかつたよ。そしてね、それからね、あのセル……セルブラスのお話をしてくれたの。ね、あの剛……剛勇？ 剛勇なサラセン人はスパルタ人なの。そしてじぶんはランプで片手をやかれたの。でも、片手でもつて橋の上に立つて、艦隊の命令をしたの。そしてね……それからね、あのね……。」

お母ちやまは、そんなお話はおすきでないらしく、

「へえ、えらいのね。さあ、トウロツト、スープをおあがり。」

とおつしやいました。

ですからトウロツトはスープを食べました。トウロツトの目のまへには、みどり色の顔かけをかけ、茶のサージ服を着た、ミスの勇敢な立像がうかんでゐます。トウロツトは、その像をまじ／＼と見すゑながら、スープをすゝりました。

青空文庫情報

底本：「日本児童文学大系 第一〇巻」ほるぷ出版

1978（昭和53）年11月30日初刷発行

底本の親本：「鈴木三重吉童話全集 第五巻」文泉堂書店

1975（昭和50）年9月

初出：「赤い鳥」赤い鳥社

1929（昭和4）年1月

入力…tatsuki

校正…林 幸雄

2007年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

青い顔かけの勇士

鈴木三重吉

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>